

# 「宍粟が生んだ大関 朝日嶽留蔵」

現在、年に六回開催される大相撲の歴史は、江戸時代にさかのぼります。その頃の大相撲は、季節ごとに一回、年に四回開催されたので、四季勧進相撲とも呼ばれていました。この大相撲が開催された江戸、京都、大坂の三都には、相撲を職業とする相撲集団がそれぞれ存在しており、このうち、江戸（東京）と大阪の相撲集団である東京相撲と大阪相撲が合併して、財団法人大日本相撲協会（現在の日本相撲協会の前身）が誕生したのです。昭和二年（一九二七）のことでした。したがって、現在の協会には大阪相撲の「痕跡」が残っています。年寄や部屋の名前である時津風や朝日山、小野川といった名跡がそれです。これらは、もともとは大阪相撲の頭取（親方のこと）の名前なのです。



大関昇進記念の写真  
(大阪歴史博物館蔵)

波賀町の原不動滝公園の一角に記念碑が残っている朝日嶽留蔵（本名幸福留蔵。一八八九―一九七四）も、大正時代に活躍した大阪相撲の力士でした。

波賀町は、江戸時代から相撲熱の盛んなところで、一月の宝殿神社の祭礼には、因州、播州の草相撲（素人相撲）の力士たちを招いて奉納相撲や子供相撲が開かれ、多数の見物人が押し寄せたといえます。一五歳の時に木炭六俵（約一二キロ）を一人で背負って運んだという逸話が残る幸福少年も子供相撲で活躍したことでしょう。

小学生の頃から家業の炭焼き業を手伝い、木炭の搬出作業に従事していた幸福少年は、明治四四年（一九一）に大阪相撲の三保ヶ関部屋に入門します。入門前は小野川調五郎親方の紹介で、木村越後という行司の付け人をしていたといわれています。小野川親方は、西宮鳴尾出身の大阪相撲の実力者。波賀町を含めた播州地方の草相撲を傘下におさめて、草相撲の親方たちに「地方頭取の免許」を与えていたようです。

力士朝日嶽は、身長一六二センチの小兵ながら、強靱な足腰・強い腕力をいかして、うなぎのぼりに出世します。大正九年（一九二〇）五月場所で優勝すると、翌年大関に昇進しました。昇進直後の二月二七日に



鴻池組から寄贈された化粧廻し  
(宍粟市教育委員会蔵)

は、故郷の波賀町で大関昇進記念の相撲を開催しました。朝日嶽はその後、肺ジストマという病気になり、成績もふるわなくなり、しかも力士の養老金問題をめぐって紛争が生じ、その責任をとり、大正一二年五月に廃業してしまいました。

角界を離れた朝日嶽は、現役時代の後援者であった建設会社の鴻池組で八〇歳近くまで働きました。その間、昭和四二年（一九六七）に息子夫婦がガス中毒で亡くなるという不幸にあい、遺骨を故郷に埋葬するため墓石を注文したところ、それを聞いた波賀町相撲協会の役員の人たちが朝日嶽の記念碑を建立することを決めたのです（竣工は翌年）。立派な記念碑が建てられたのには、このような事情がありました。現在、朝日嶽の遺品は、本市教育委員会と大阪歴史博物館に残されています。鴻池組から寄贈された化粧廻しなどが市民センター波賀に展示されています。

(大阪歴史博物館学芸員 飯田直樹)

## 編集後記

今年の夏は暑かったですね。もちろん気温も高かったのですが、リオオリンピック、パラリンピックでの日本人選手の大活躍に熱く盛り上がりました。次は2020年の東京オリンピックです。前回、東京オリンピックが開催されたのは1964年。戦後の復興と国際社会への参加を全世界に発信する大会でした。あれから50余年が経ち、その当時、社会の第一線で活躍されていた人々は、「敬老の日」を迎えられる世代となっています。見事にオリンピックを成功された皆さんに習い、今度は私たちが頑張る番です。皆さんから託されたバトンは、大事に引き継いでいきます。敬老の日を迎えられます市内6,648人の皆さん、誠におめでとうございます。 眞